

文語日誌（平成三十一年二月十二日）

土屋 博

「日本蓄音機文句全集」

（誠文堂書店、大正五年六版、定價金壹圓廿錢、八七五頁）

古書價格千圓也。銀座松屋新春古書市にて購入す。序に曰く、「今や蓄音機の進歩はあらゆる音色を一小平圓板に收め得るに到り、如何に僻遠の地にあるも坐して天下の名手が肉聲に等しき音曲を聴取するの便宜を有す。併も曲調の微妙なる時として章句の判明を缺き、爲めに聴者をして歌曲の意義を領解するに苦しみ或は之を放吟するに據るものなきを遺憾とし、茲に蓄音機音譜として流布する歌曲九百餘種を分類輯録して本書を編み、以て歌謠の品種と眞趣とを披瀝し、併せて歌曲の妙味を普知せしむるの一助となさんと欲す」と。

本書には大正五年時點にて發賣せられたる音盤に収録せられたる文句のすべて、ジャンルに拘はらず、忠實に活字化せられ、當時の時代を寫す鏡の如きものなりと覺ゆ。

目次順に見るに、宗教（眞宗正信偈「善導獨明佛正意」など）、唱歌及歌劇（鳩ぼつぼ、雀、雪やこんこん）など）、薩摩琵琶（月に叢雲花に風」など）、筑前琵琶（仰げば高き日の本の光り長閑けき初日影」など）、詩吟（薄命能伸句日壽」など）、謠曲（我も亦いざ言問ん都鳥」など）、長唄（花の外には松ばかり暮れ初めて鐘や響くらん鐘に恨は數々御座る」など）、常磐津（嵯峨やおむろの花ざかり浮氣な蝶も色かせぐるわの者に連れられて外珍しき嵐山」など）、清元（常から主の仇な氣を知て居ながら女房になつて見たいの慾が出て」など）、歌澤節（わしが國さで見せたい物はむかしや谷風今伊達模様」など）、新内（忍び音の枕二つを其まゝにとりもなをさぬま夢の」など）、義太夫（小太郎が母涙ながら若君菅秀才のお身がはり、お役に立て下さつたかまだか様子が聞きたいと」など）、浪花節（此處は但馬の豊岡で心も急ぐ寺坂が來つて見れば左手數多小供が集りて凧揚げ致す其の中に」など）、落語（無筆のお笑を一席申上ます」など）、端唄（春雨にしつぽり濡るゝ鶯の羽風に匂ふ梅が香や」など）、小唄（芝で生れて神田で育ち今ちや火消のアノ纏持」など）、演説（大隈重信「凡そ物の善惡邪正順逆は實質的に道德的に發達するものである。國民が善政を望まんとすればだ、是れに對する自ら輿論が起らなくてはならぬと思ひまするんである」など）。

昔の録音を聴きつつ本書を併讀することを得ば、味はひ一層高まること必定なり。ちなみに小生の手許には、「日本の歴史的演説」なるCD四枚組の箱入りセットあり（日本コロムビア社百周年記念、平成二十二年發賣）。中に本書にある大隈重信の演説、六分間餘り収録せらる。興味深きことこの上無し。

（平成三十一年二月二十五日受附）